23

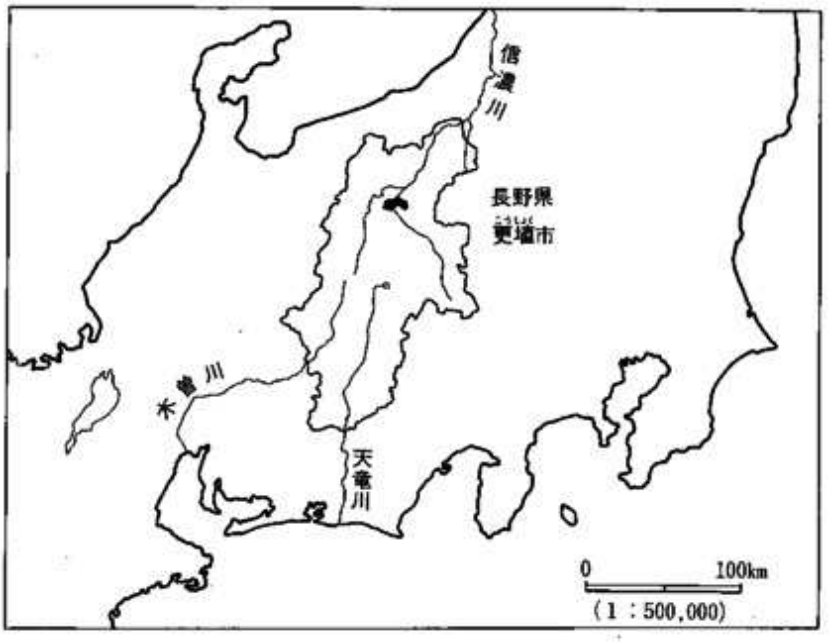
長野県更埴市　屋代遺跡群

馬口遺跡 Ⅳ

――長野県屋代高等学校合宿所建設に伴う発掘調査報告書――

1989

更埴市教育委員会
更埴市遺跡調査会



目　次

目次　例言

Ⅰ　調査の概要……1

Ⅱ　調査の経過……2

Ⅲ　調査内容……3

Ⅳ　まとめ……6

Ⅴ　馬口遺跡の調査成果と課題……7

写真図版……11

例　言

1．本書は、昭和63年6月18日から6月29日の間に長野県屋代高等学校合宿所建設に先だって実施した馬口遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査・整理は山根洋子が担当した。

3．本書の執筆は矢島宏雄、佐藤信之、山根が行い、編集は山根が行った。

4．本調査の出土遺物、実測図、写真等の資料は全て更埴市教育委員会に保管されている。

5．本調査関係資料には、馬口遺跡Q地点を略し、「BGQ」と表記している。

Ⅰ　調査の概要

1　発掘調査委託者　長野県屋代高等学校

2　発掘調査受託者　更埴市遺跡調査会

3　発掘調査実施者　更埴市教育委員会・更埴市遺跡調査会

4　発掘調査場所及び土地の所有者　更埴市大字屋代1,000番地　長野県屋代高等学校

5　発掘調査遺跡名　屋代遺跡群馬口遺跡Q地点（市台帳No.31－4）

6　調査の目的　公共事業　屋代高等学校合宿所建設に伴う発掘調査

7　調査期間　昭和63年6月18日～同年6月29日（10日間）

8　調査面積　115㎡以上

9　調査方法　全面発掘調査

10　調査費用　費用総額　770,000円（全額事業者負担）

11　調査会の構成

会長	安藤　敏	更埴市教育委員会教育長
理事	田沢佑一	更埴市議会議員
	佐藤穂次	更埴市教育委員会教育委員長
	山崎重信	更埴市区長会長
	相沢正幸	更埴市文化財審議会長
	寺沢政男	更埴市役所総務課長
監事	山崎栄二	更埴市社会教育委員会委員長
	関　京子	更埴市役所会計課長
幹事	武井豊茂	更埴市教育委員会社会教育課長
	西沢秀文	更埴市教育委員会社会教育課文化財係長
	矢島宏雄	更埴市教育委員会社会教育課文化財係主事
	佐藤信之	更埴市教育委員会社会教育課文化財係主事

12　調査団の構成

団長	安藤　敏
調査担当者	山根洋子　更埴市教育委員会社会教育課文化財係
調査参加者	青木美知子　阿部富子　伊藤恵子　小林昌子　小松由里子 近藤満春　高橋八重子　中山忠治　原　要吉　宮崎恵子
事務局	武井豊茂　西沢秀文　矢島宏雄　佐藤信之　青木猛治　田中啓子 山根洋子　（社会教育課文化財係）

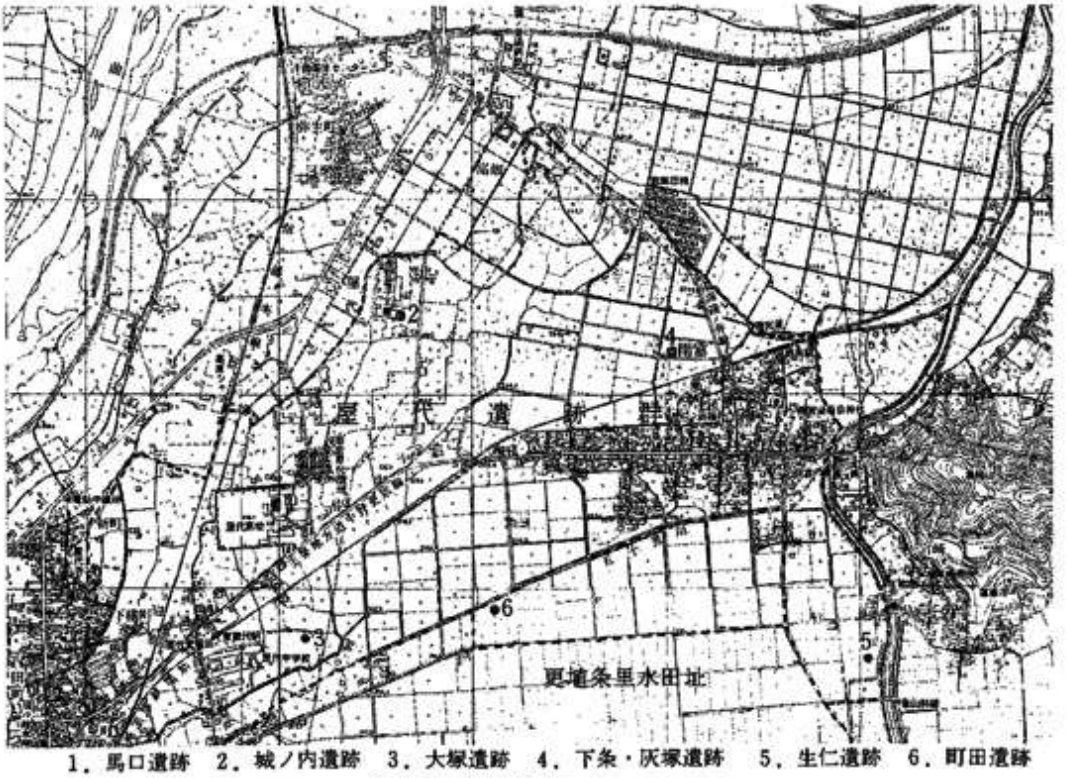
II　調査の経過

昭和63年５月23日、長野県屋代高等学校より合宿所の建設を８月に予定しているとの連絡があり、市教育委員会では、57条を至急提出するよう依頼した。５月28日、学校より発掘調査の依頼があったため調査計画書を作成し、県教育委員会の指導を仰いだ。６月３日、県教育委員会より調査計画書に基づき発掘調査を実施するよう指導があった。市教育委員会では急なことであるため、市遺跡調査会で対応することとし、準備を開始した。６月13日、長野県屋代高等学校と市遺跡調査会との間に調査費用770,000円、調査面積115㎡以上で発掘調査委託契約が締結された。７月になると周辺の水田に水が入り、出水により調査ができなくなるため、６月中に終了できるよう６月18日に98条の提出を行い、その日より調査を開始した。雨季であり、連日雨にたたられたが、出水はなく、水田址を検出して、６月29日に調査を終了した。

経　過

６月18日	重機による表土除去開始
６月20日	作業員入り掘り下げ始める 畦畔検出
６月21日	畝状遺構検出
６月22日	遣り方設定　実測開始
６月23日	全景撮影
６月24日	雨のため午後作業中止
６月25日	雨のため午後作業中止
６月27日	実測を残して発掘調査終了
６月28日	実測完了　現場作業完了
６月29日	重機による埋戻し

発掘調査日数　10日間
（うち半日雨天中止　３日）
調査員　　延べ　８人
作業員　　延べ　22人



1．馬口遺跡　2．城ノ内遺跡　3．大塚遺跡　4．下条・灰塚遺跡　5．生仁遺跡　6．町田遺跡

第１図　遺跡位置図（１：20,000）

Ⅲ 調査内容

今回の調査では、南北方向に走る畦畔（13号畦畔）と、畝状遺構をもつ水田および、水田面下から溝を検出している。

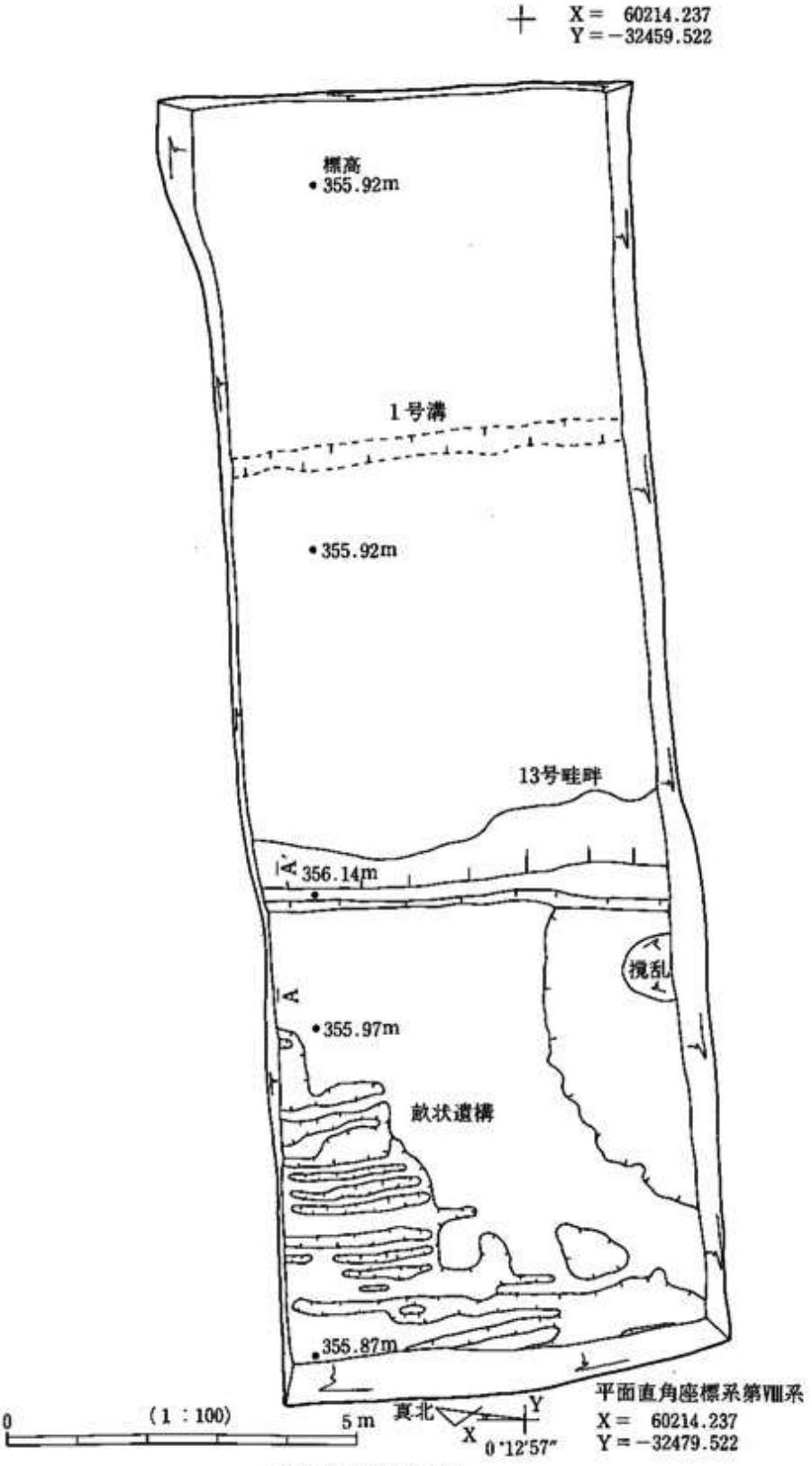
畦畔の幅は基部が0.7～1.7m、上端で0.2～0.5mを測り、0.3m程の高さをもつ。断面形はなだらかな傾斜をもつカマボコ形で、西側に比べて東側の裾は明確でなく、だらだらと水田面へ続いている。遺物は土師器・須恵器の破片があるが、小片のため図示できない。

畦畔より西側の調査区では畝状遺構を検出した。標高約355.9mで、厚く堆積した茶褐色砂層を取り除くと褐色混灰色粘土層（水田の溶脱層）となり、高さ２～５cm程の凹凸が筋状に畦畔と平行して続いている。畦畔に近づくにつれ凹凸の範囲が狭くなり、畦畔から約２m離れた地点で全体的に10cm程高くなって畝状遺構は終わっている。遺物は土師器・須恵器の小片が出土している。

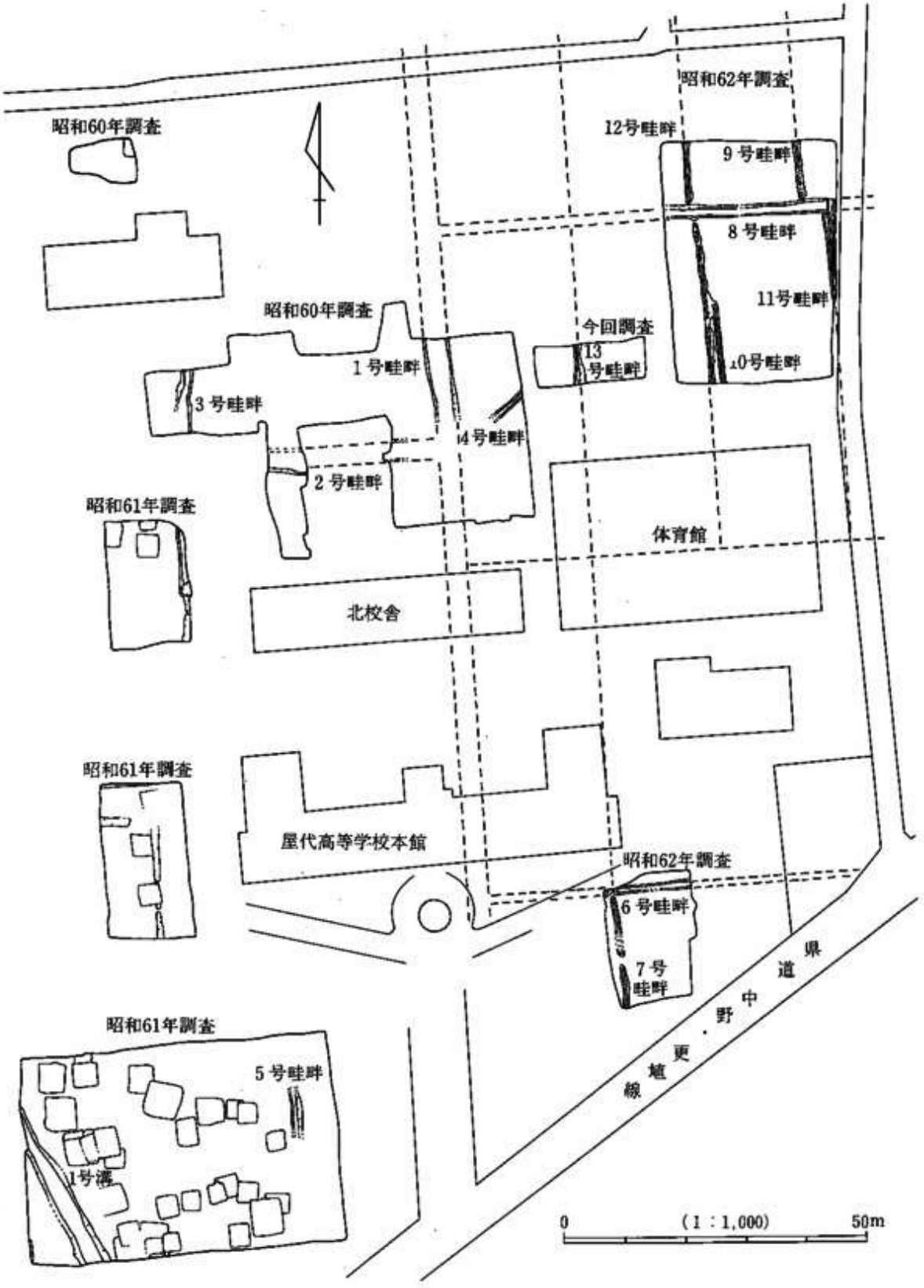
畦畔より東側の水田面はほぼ水平な平坦面で標高約355.9m、図示した遺物はこの地点から出土している。１は須恵器甕の胴部である。２は須恵器高台付坏で、底部には左回りのナデが施されている。

溝は平坦な水田面の下層から検出した。鉄分沈澱層の下層の黒褐色粘土層を掘りこんでおり、覆土は褐色混灰色粘土である。畦畔とほぼ平行に南北に走り、幅約40cm、深さ約10cmを測る。出土遺物はない。

第２図　調査風景


X = 60214.237
Y = −32459.522
標高
355.92m
1号溝
355.92m
13号畦畔
A'
356.14m
撹乱
A
355.97m
畝状遺構
355.87m
0
(1 : 100)
5 m
真北
X
Y
0°12'57"
平面直角座標系第Ⅷ系
X = 60214.237
Y = −32479.522

第3図　遺構全体図



第4図　馬口遺跡調査地点および畦畔位置図

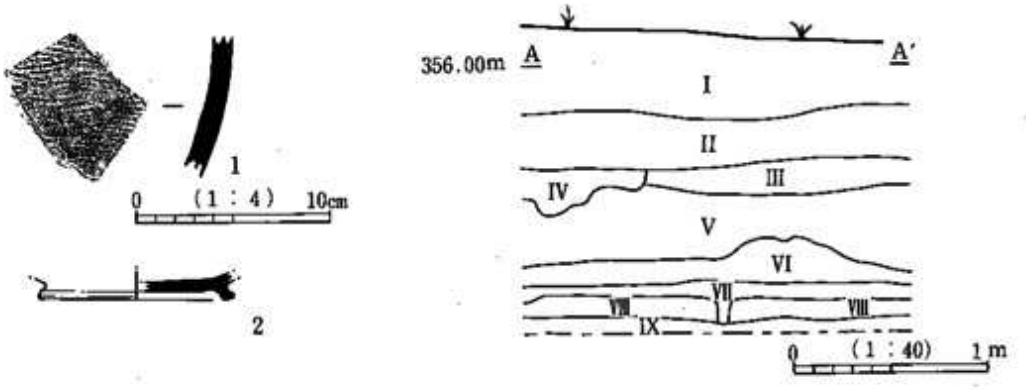
Ⅳ まとめ

今回の調査は約115㎡と小規模の範囲ながら、これまでに調査された“更埴条里水田址”の地割が再確認できた。

馬口遺跡13号畦畔として検出した畦畔は、おそらく昨年調査された馬口遺跡７号畦畔に続くもので、その大きさと位置から、１町（60歩）四方の「坪」内を南北に細長く５等分に区切った畦畔と考えられる。昭和60年に検出された「坪」を区画すると考えられる馬口遺跡１号大畦畔と、昨年調査された馬口遺跡10号畦畔との中間に位置し、それぞれと約21mの間隔をもつ。この畦畔の検出により、馬口遺跡で検出された水田址が「半折型」（12歩×30歩（約22m×54m））に区画されていた水田であったことが裏付けられる。

調査区西側で検出した畝状遺構は、昭和60年の馬口遺跡の調査で調査区東側より検出された、畝状遺構の続きと考えられる。１号大畦畔のすぐ脇から始まり畦畔と平行してみられる畝状遺構は、今回の調査では畦畔との間に平坦な面をはさんでおり、様相が異なる。畦畔をはさんだ西側からは畝状遺構が全く検出されず、この遺構と畦畔とはお互いに関係があると考えられる。

最後に調査にあたっては、発掘調査に全面的に御協力くださった長野県屋代高等学校、連日の雨の中作業に参加してくださった皆様に心から謝意を表し、今後の埋蔵文化財保護への御協力をお願いするところであります。



Ⅰ層　黒褐色土（盛土）
Ⅱ層　灰褐色粘土（現在の水田）
Ⅲ層　褐色砂（鉄分沈澱）
Ⅳ層　灰黒色砂
Ⅴ層　茶褐色砂
Ⅵ層　褐色混灰色粘土（水田および畦畔）
Ⅶ層　灰色混褐色粘土（鉄分沈澱）
Ⅷ層　灰色粘土含む黒褐色粘土
Ⅸ層　黄褐色粘質土（地山）

第５図　出土遺物および土層図

V　馬口遺跡の調査成果と課題

1．水田址の埋没時期について

更埴条里水田址の調査は昭和36年から39年にかけて実施された発掘調査が初源であり、その後近年になって北中原遺跡の調査、あるいは今回第４次調査を行った馬口遺跡の調査が実施されている。これらの調査により、水田址における坪内の地割については次第に明らかとなってきたが、この条里的な遺構がいつ構築されたかという点に関しては、未だ明確となっていない。

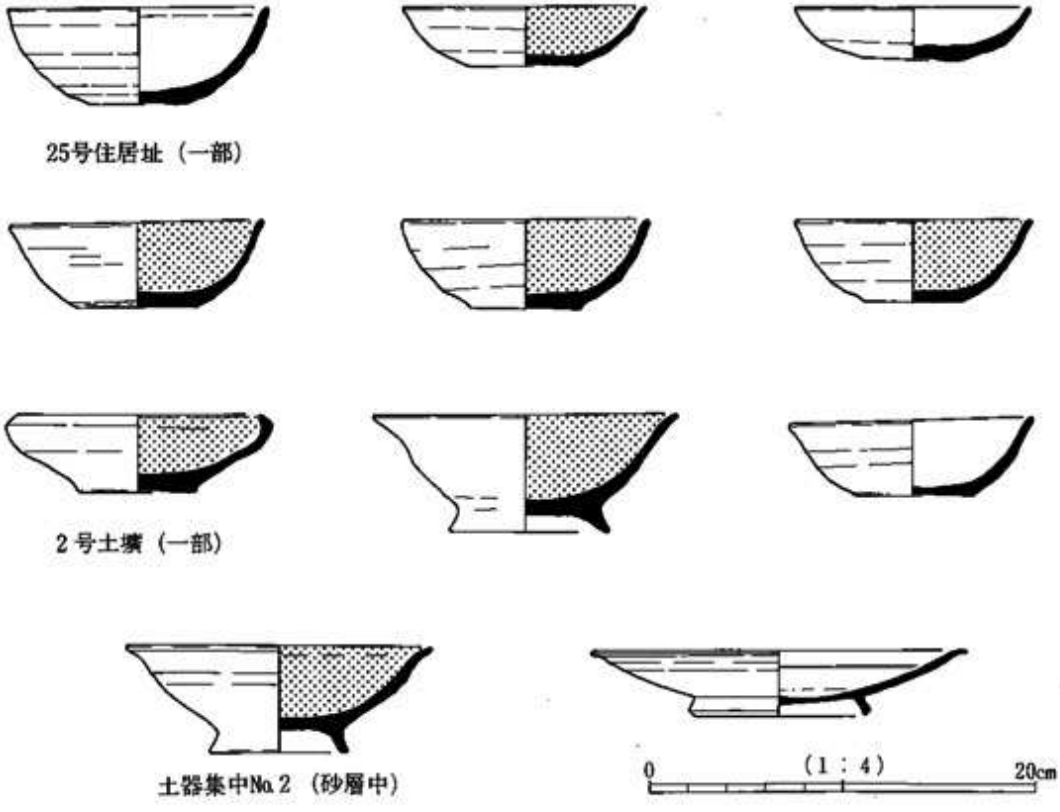
最初に実施された調査では、畦畔の盛土中より出土した須恵器片が９世紀前後のものであり、上層の砂層中より出土した土器類が11世紀以降のものであるとして、10世紀前後に造成された水田遺構と考えている。また千曲川をはさんだ対岸では、昭和58年に長野市教育委員会によって石川条里的遺構の調査が実施され、砂層に覆われた水田址を検出している。10枚が重なって出土した須恵器坏により、９世紀後半から10世紀の年代が与えられている。

更埴条里水田址の年代を知る手がかりとして、当初より水田址を厚く覆う砂層が問題とされており、『日本紀略』に記された仁和４年(888)に信濃国を襲ったとされる大洪水との関係で、注目されてきた。馬口遺跡でも第１次の調査において、水田址を形成する土壌を覆土に持つ住居址からの出土遺物と、砂層中の出土遺物との比較から、この砂層が９世紀後半から10世紀中葉頃のものと考えた。

今回の調査では水田遺構の年代を推測できる資料には恵まれなかったが、これまでには３次の馬口遺跡の調査により、奈良時代から平安時代の住居址46棟が検出されている。これらのうち、砂層を覆土に持つことから、水田遺構と同時に埋没したと理解できる遺構として、第２次の調査で検出された24・25号住居址と、２号土壙をあげることができる。24号住居址はほとんど出土遺物がなく、25号住居址の遺物は、混入と考えられる高台を持つ須恵器坏１点を除くと、土師器だけとなる。土師器坏は、底部付近を除いて内面のミガキを施しておらず、黒色処理を施すものは１点のみである。器高が小さくなり、焼成もよくない。２号土壙からは24点の坏がほぼ完形で出土した。このうち21点は土師器で、内面は全てミガキを行った後、黒色処理を施している。底部は２点には高台が付けられ、１点にはヘラケズリがみられるが、他は糸切りのままである。須恵器の焼成は悪く軟質で、黒斑が認められる。器形は土師器に近く、底部は糸切りのあと無調整であり、終末期の様相を示している。一方、この砂層を切って構築された住居址が検出されれば、さらに水田遺構の築造時期が明確になると思われるが、馬口遺跡を含め屋代遺跡群内では、明らかにこの砂層を切っている遺構は、中世に至るまで検出されていない。

25号住居址と２号土壙との間には若干の時間差があるとも考えられるが、この砂層を覆土に持つ遺構の遺物群に比定できるものとしては、更埴市大塚遺跡住居址内出土遺物がある。馬口遺跡の南約400mほどにあたるが、砂層との関係はわからない。ここでは須恵器の出土は伝えられてい

ないが、土師器坏は前述の遺物と同様の形状を呈しており、共伴した灰釉陶器の耳皿・手付小瓶から、黒笹90号窯期と考えられている。また長野市浅川扇状地遺跡群牟礼バイパスD地点13号住居址の資料も、土師器坏は内面にミガキの後黒色処理を施している。その底部は糸切痕を残すものと、回転ヘラケズリをあとに施しているものがある点、須恵器の焼成が悪く灰白色で、底部は糸切底を残しており、器形も一見して土師器との判別が難しくなる点など共通する点が多く、甕には頸部から口縁部が「コ」の字状をなす北武蔵形の甕が含まれている。これらに加え水田面直上の砂層中より出土した遺物の中に、光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器段皿が含まれていたことを考えれば、やはり9世紀後半から10世紀中葉の年代が想定され、水田が埋没した年代もほぼ同じと考えられる。しかし、更埴条里水田址内に存在し、昭和45年に発掘調査が行われている町田遺跡の1号住居址では、須恵器坏が姿を消し、土師器坏も黒色処理を施したものが減少し、足高高台を持つものが目立つようになる。また羽釜の存在も認められることから、11世紀以降の年代が考えられる。砂層との関係については記されていないが、この微高地も砂層の影響を受けているものと思われ、これらの遺跡との関係等今後さらに検討が必要になることはいうまでもない。



第6図　昭和61年度馬口遺跡発掘調査出土遺物（馬口遺跡II）

2．条里的地割について

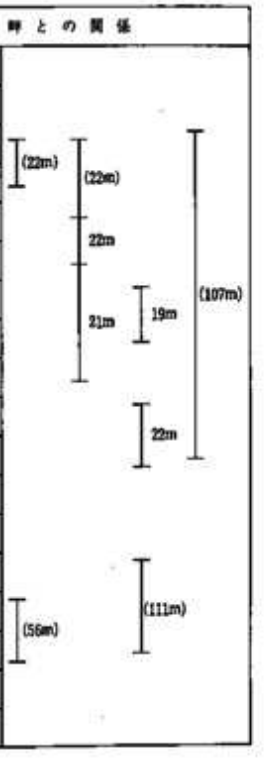
これまでの４年次にわたる発掘調査及び、隣接する北中原遺跡の発掘調査によって、馬口遺跡周辺の埋没水田址の区画が明らかとなってきた。また、同時に前回の条里調査結果と異なる事実も明らかとなり、新たな問題が指摘されている。

馬口遺跡で検出された畦畔には、2.5m以上の条・里の境界をなすもの（１号畦畔）、１m以上の坪の境界をなすもの（６号・８号・北中原１号畦畔）、１m以下の坪内を区画するもの（７号・９号・10号・11号・12号・13号・北中原３号・４号畦畔）がある。

南北方向の１号畦畔と、北中原１号畦畔との間隔は107mを測り、東西方向の８号畦畔と６号畦畔との間隔は111mを測り、坪を区画していることが明らかとなった。坪内は、今回の調査により検出された南北方向の13号畦畔や、同じ南北方向の12号・９号・北中原３号畦畔などによって、21～22mの間隔に５分割されていた。さらに、東西方向の８号畦畔と北中原４号畦畔の間隔は56mを測り、「半折型」の坪割が施されていることが明かとなった。

一方、８号畦畔を東側に延長した前回調査の第408地点における坪割は、南北方向の小畦畔により10等分され、さらに東西方向の小畦畔によって２等分された「長地・半折折中型」の今回と異なった坪割が確認されている。また、両地点の坪割にあたり東西方向の里線は、８号畦畔の延長線上に一致するのに対して、南北方向の条線は前回調査のものから、西偏へ約30m程ずれがあることが判明した。両地点ともに、同時期の厚い砂層に埋った水田址であることから、地点により

南北方向畦畔	方向	上部幅	下部幅	最大高(m)	断面形状及び構造上の特徴		他の畦畔との関係	
馬口 3号畦畔	N-3°-E	1.4	2.5	0.5	台形	畦畔の西側に平行する溝がある	条里的地割をなさない	
5号畦畔	N-10°-W	0.8	1.7	0.4	台形		条里的地割をなさない	
1号畦畔	N-5°-W	3.0	4.0	0.55	台形	畦畔下に３本の平行する溝がある	条を区画（6号・8号と直交）	
7号畦畔	N-5°-W	0.4	0.8	0.2	カマボコ状		坪内を区画　6号と直交	
13号畦畔	N-6°-W	0.2～0.5	0.7～1.7	0.3	カマボコ状		坪内を区画　（8号と直交）	
10号畦畔	N-6°-W		0.6	0.2	カマボコ状	途中から平行する２本の畦畔となる	坪内を区画　8号と直交	
12号畦畔	N-5°-W	0.3	0.7	0.15	カマボコ状		坪内を区画　8号と直交	
9号畦畔	N-5°-W	0.3	0.7	0.15	カマボコ状		坪内を区画　8号と直交	
11号畦畔	N-5°-W	0.5	0.8		台形		坪内を区画　8号と直交	
北中原3号畦畔	N-5°-W		1.2	0.2	低三角形		坪内を区画　（4号と直交）	
1号畦畔	N-5°-W	1.8	2.5	0.25	カマボコ状	畦畔大に平行する溝がある	坪を区画　（4号と直交）	
東西方向畦畔								
馬口 2号畦畔		2.0	3.2	0.5	台形	畦畔大に平行する溝がある	条里的地割をなさない	
6号畦畔	N-86°-E	0.6	1.4	0.24	台形		坪を区画（1号・7号と直交）	
8号畦畔	N-87°-E	0.9	2.0	0.3	台形	＊S38年調査第３地点検出畦畔	坪を区画　（1号能と直交）	
北中原4号畦畔	N-86°-E		1.0	0.3	カマボコ状		坪内を区画（1号・3号と直交）	
斜行畦畔								
馬口 4号畦畔	N-50°-E	0.5	0.6	0.1	台形		段内を区画（?）	



馬口遺跡・北中原遺跡検出の畦畔

異なった地割線が存在するのか、ずれの原因については今回の調査では明らかにすることはできず、今後の課題である。

また、自然堤防上で最高所となる馬口遺跡では、１号畦畔の西側50m程から集落址となっている。その間は水田址が続くものの、検出された３本の畦畔はいずれも条里的地割を示していない。こうしたことから、自然堤防上の条里的地割は、この１号畦畔をもって西限となるものと考えられる。

３．下層水田址の有無について

昨年来、千曲川を挟み対岸の長野市石川条里的遺構において、長野自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、砂層に覆われた水田址の下層から弥生時代までの水田址が何面も調査されている。

前回の調査でも大きな課題とされていた更埴条里水田址の下層に、水田址の存在を確かめるためにプラント・オパール分析調査並びに、花粉分析調査を実施した。馬口遺跡及び屋代田圃中央部においても、分析の結果新たな水田址は検出されなかった。しかし、調査した水田層で検出されたプラント・オパールの量が極めて多量で注目された。

馬口遺跡においては、当時の年間収量を10ａあたり100kgと仮定した場合、最大720年と長期にわたり稲作が営まれたと推定された。過大な値となっているが、かなりの長期間にわたり稲作が営まれたものと考えられる。このことから、下層に水田址が検出されないのは、同一面において稲作が行われてきたことに由来するとも考えられる。

更埴条里水田址については、50haにわたる中で１haにも満たない調査結果からは、まだまだ解明しなければならない課題は大きなものがある。

参考文献

長野県教育委員会『地下に発見された更埴市条里遺構の研究』　1968年

岡田正彦「長野県更埴市屋代馬口遺跡調査報告」『信濃』23－５　1971年

更級埴科地方誌刊行会『更級埴科地方誌』第２巻　1978年

更埴市教育委員会『屋代馬口Ｋ』　1978年

岩崎卓也「更埴条里水田遺跡」『長野県史』考古資料編全１巻(2)　1982年

更埴市教育委員会『馬口遺跡』　1986年

同　『馬口遺跡II』　1987年

同　『北中原遺跡』　1987年

同　『馬口遺跡III』　1988年

同　『北中原遺跡II』　1988年

同　『屋代遺跡群・更埴条里水田址詳細分布調査報告書』　1988年

長野県史刊行会『長野県史』考古資料編全１巻(4)　1988年

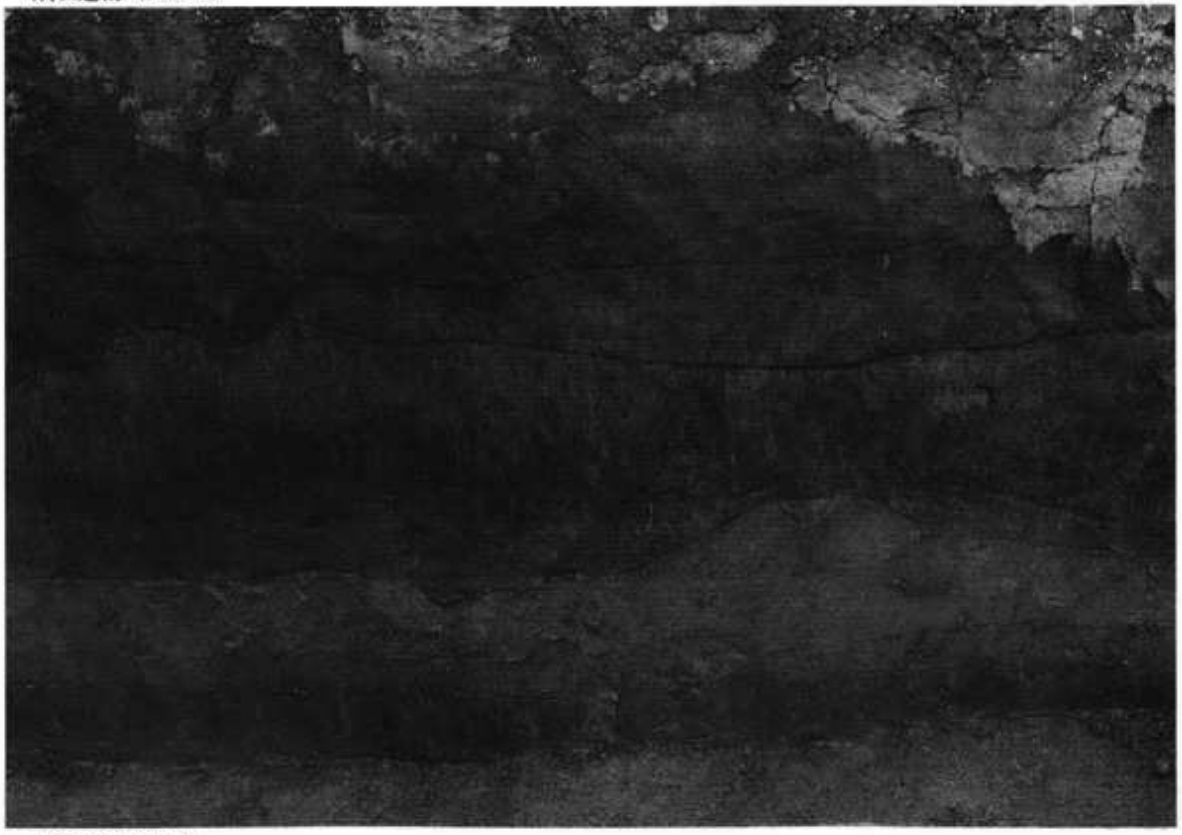
調査風景（西より）

調査区全景（西より）

水田面下の遺構検出（西より）

図版　2

畝状遺構（西より）



土層断面（北壁）

馬口遺跡IV ―長野県屋代高等学校合宿所建設に伴う発掘調査報告書―

発行日　平成元年3月31日
編　集　更埴市遺跡調査会
発　行　更埴市教育委員会
〒387　長野県更埴市大字杭瀬下84番地
TEL (0262) 73－1111
印　刷　ほおずき書籍株式会社
〒381　長野市中越293
TEL (0262) 44－0235